



吾輩は田舎者

ア: 中編





新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年10月10日 印刷

昭和55年10月20日 発行

(第20刷)



夏目漱石著

吾輩ハ猫デアル (中編)

大倉書店・服部書店版

刊 行 財団法人 日本近代文学館
東京都目黒区駒場4-3-55
代表者 小田切進

編 集 名著複刻全集編集委員会
代表者 稲垣達郎

総発売元 株式会社 ほるぶ
東京都新宿区新宿2-19-13
代表者 中森蒔人

製 作 株式会社 ほるぶ出版
東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

序

「猫」の稿を繼ぐときには、大抵初篇と同じ程な枚數に筆を擱いて、上下二冊の單行本にしやうと思つて居た。所が何かの都合で頁が少し延びたので書肆は上中下にしたいと申出た。其邊は營業上の關係で、著作者たる余には何等の影響もない事だから、それも善からうと同意して、先づ是丈を中篇として發行する事にした。

そこで序をかくときに不圖思ひ出した事がある。余が倫敦に居るとき、亡友子規の病を慰める爲め、當時彼地の模様をかいて遙々と二三回長い消息をした。無聊に苦んで居た子規は余の書翰を見て大に面白かつたと見えて、多忙の所を氣の毒だが、もう一度何か書いてくれま

いかとの依頼をよこした。此時子規は餘程の重體で、手紙の文句も頗る悲酸であつたから、情誼上何か認めてやりたいとは思つたものゝ、こちらも遊んで居る身分ではなし、さう面白い種をあさつてあるく様な閑日月もなかつたから、つい其儘にして居るうちに子規は死んで仕舞つた。

筐底から出して見ると、其手紙にはかうある。

僕ハモ一ダメニナツテシマツタ、毎日譯モナク號泣シテ居ルヤウナ次第ダ、ソレダカラ新聞雜誌ヘモ少シモ書カヌ。手紙ハ一切廢止。ソレダカラ御無沙汰シテスマヌ。今夜ハフト思ヒツイテ特別ニ手紙ナカク。イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カツタ。近來僕

チ喜バセタ者ノ隨一ダ。僕ガ昔カラ西洋ヲ見タガツテ
居タノハ君モ知ツテルダロ。夫ガ病人ニナツテシマ
ツタノダカラ残念デタマラナイノダガ、君ノ手紙ヲ見テ
西洋ヘ往タヤウナ氣ニナツテ愉快デタマラス。若シ書
ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨシテクレヌ
カ（無理ナ注文ダガ）

書ハガキモ慥ニ受取タ。倫敦ノ焼芋ノ味ハドンナカ
聞キタイ。

不折ハ今巴理ニ居テユーランノ處ヘ通ツテ居ルサウ
チヤナイカ。君ニ逢フタラ鯉節一本贈ルナド、イフテ
居タガ、モーションナ者ハ食フテシマツテアルマイ。

虛子ハ男子ヲ舉ゲタ。僕ガ年尾トツケテヤツタ。

鍊郷死ニ非風死ニ皆僕ヨリ先ニ死ンデシマツタ。

僕ハ迎モ君ニ再會スルコハ出來ヌト思フ。萬一出來
タトシテモ其時ハ話モ出來ナクナツテルデアロ。實
ハ僕ハ生キテキルノガ苦シイノダ。僕ノ日記ニハ「古白
日來」ノ四字ガ特書シテアル處ガアル。

書キタイコハ多イガ苦シイカラ許シテクレ玉ヘ。

明治卅四年十一月六日燈下ニ書ス

東京 子 規拜

倫敦ニテ

漱 石兄

此手紙は美濃紙へ行書でかいてある。筆力は垂死の
病人とは思へぬ程慥である。余は此手紙を見る度に何

だか故人に對して濟まぬ事をしたやうな氣がする。書きたいことは多いが、苦しいから許してくれ玉へとある文句は露伴りのない所だが、書きたい事は書きたいが、忙がしいから許してくれ玉へと云ふ余の返事には少々遁辭が這入つて居る。憐れなる子規は余が通信を待ち暮らしつゝ、待ち暮らした甲斐もなく呼吸を引き取つたのである。

子規はにくい男である。嘗て墨汁一滴か何かの中に、獨乙では姉崎や、藤代が獨乙語で演説をして大喝采を博してゐるのに、漱石は倫敦の片田舎の下宿に燻つて、婆さんからいぢめられてゐると云ふ様な事をかいた。こんな事をかくときは、にくい男だが、書きたいことは多いが、

苦しいから許してくれ玉へ杯と云はれると氣の毒で堪らない。余は子規に對して此氣の毒を晴らさないうちに、とう／＼彼を殺して仕舞つた。

子規がいきて居たら「猫」を讀んで何と云ふか知らぬ。或は倫敦消息は讀みたいが「猫」は御免だと逃げるかも知らない。然し「猫」は余を有名にした第一の作物である。有名になつた事が左程の自慢にはならぬが、墨汁一滴のうちで暗に余を激勵した故人に對しては、此作を地下に寄するのが或は恰好かも知れぬ。季子は劍を墓にかけて、故人の意に酬いたと云ふから、余も亦「猫」を碣頭に獻じて、往日の氣の毒を五年後の今日に晴さうと思ふ。

子規は死ぬ時に糸瓜の句を詠んで死んだ男である。

だから世人は子規の忌日を糸瓜忌と稱へ、子規自身の事を糸瓜佛となづけて居る。余が十餘年前子規と共に俳句を作つた時に

長けれど何の糸瓜とさがりけり

と云ふ句をふらくと得た事がある。糸瓜に縁があるから「猫」と共に併せて地下に捧げる。

どつしりと尻を据えたる南瓜かな

と云ふ句も其頃作つたやうだ。同じく瓜と云ふ字のつく所を以て見ると南瓜も糸瓜も親類の間柄だらう。親類付合のある南瓜の句を糸瓜佛に奉納するのに別段の不思議もない筈だ。そこで序ながら此句も靈前に献上する事にした。子規は今どこにどうして居るか知らな

い、恐らくは据ゑるべき尻がないので落付をとる機械に窮してゐるだらう。余は未だに尻を持つて居る。どうせ持つてゐるものだから、先づどつしりと、おろして、さう人の思はく通り急には動かない積りである。然し子規は又例の如く尻持たぬわが身につまされて、遠くから余の事を心配するといけないから、亡友に安心をさせる爲め一言斷つて置く。

明治三十九年十月

夏目漱石



夏目漱石

(第六)

かう暑くては猫と雖遣り切れない。皮を脱いで、肉を脱いで骨丈で涼みたいものだ。と英吉利のシドニー・スミスとか云ふ人が苦しがつたと云ふ話があるが、たとひ骨丈にならなくとも好いから、責めて此淡灰色の班入の毛衣けごろは一寸洗ひ張りでもするか、もしくは當分の中質にでも入れたい様な氣がする。人間から見たら猫杯は年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて單純な無事な錢のかゝらない生涯を送つて居る様に思はれるかも知れないが、いくら猫だつて相應に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度位あびたくない事も無いが、何しろ此毛衣の上から湯を使つ

た日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢して此年になる迄洗湯の暖簾を潜つた事はない。折々は團扇でも使つて見様と云ふ氣も起らんではないが、兎に角握る事が出来ないのだから仕方がない。夫を思ふと人間は贅澤なものだ。なまて食つて然る可きものを態々煮て見たり、焼いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで餘計な手数を懸けて御互に恐悦して居る。着物だつてさうだ。猫の様に一年中同じ物を着通せと云ふのは、不完全に生れ付いた彼等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載せて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介になつたり、蠶の御世話になつたり、綿帛の御情けさへ受けるに至つては贅澤は無能の結果だと斷言しても好い位だ。衣食は先づ大目に見て勘辨するとした所で、生存上直接の利害もない所迄此調子で押して行くのは毫も合點が行かぬ。第一頭の毛など、云ふものは自然に生えるものだから放つて置く方が尤も簡便で當人の爲になるだらうと思ふのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な恰好をこしらへて得意である。坊主とか自稱するものは

いつ見ても頭を青くして居る。暑いと其上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。是では何の爲めに青い物を出して居るのか主意が立たんてはないか。さうかと思ふと櫛とか稱する無意味な鋸様の道具を用ゐて頭の毛を左右に等分して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人爲的の區劃を立てる。中には此仕切りがつゝ、むじを通り過して後ろ迄食み出して居るのがある。丸で贗造の芭蕉葉の様だ。其次には腦天を平らに刈つて左右は眞直に切り落す。丸い頭へ四角な枠をはめて居るから、植木屋を入れた杉垣根の寫生としか受け取れない。此外五分刈、三分刈、一分刈さへあると云ふ話だから、仕舞には頭の裏迄刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などゝ云ふ新奇な奴が流行するかも知れない。兎に角そんなに憂身を簍してどうする積りか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使はないと云ふのから贅澤だ。四本であるけば夫丈はかも行く譯だのに、いつても二本で済して、残る二本は到來の棒鱈の様に手持無沙汰にぶら下げて居るのは馬鹿々々しい。是で見ると人間は餘程猫より閑ひまなもので退屈のあま

り斯様ないたづらを考案して楽しんで居るものと察せられる。但可笑しいのは此閑人（きんじん）がよると障はると多忙だ多忙だと觸れ廻はるのみならず、其顔色が如何にも多忙らしい、わるくすると多忙に食ひ殺されはしまいかと思はれる程（せ）、ついで居る。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら氣樂（きらく）でよからう抔と云ふが、氣樂（きらく）でよければなるが好い。そんなにこせこせして呉れと誰も頼んだ譯でもなからう。自分で勝手な用事を手に負へぬ程製造して苦しい苦しいと云ふのは自分で火をかん／＼起して暑い／＼と云ふ様なものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通りも考へ出す日には、かう氣樂（きらく）にしては居られんさ。氣樂（きらく）になりたければ吾輩の様に夏でも毛衣を着て通される丈の修業をするがよろしい。——とは云ふものゝ少々熱い。毛衣では全く熱つ過ぎる。

是では一手專賣の晝寢も出来ない。何かないかな、永らく人間社會の觀察を怠つたから、今日は久し振りで彼等が酔興に齷齪する様子を拜見しやうかと考へて見たが、生憎主人は此點に關して頗る猫に近い性分である。晝寢

は吾輩に劣らぬ位やるし、殊に暑中休暇後になつてからは何一つ人間らしい仕事をせないので、いくら觀察をしても一向觀察する張合がない。こんな時に迷亭でも來ると胃弱性の皮膚も幾分か反應を呈して、暫らくても猫に遠ざかるだらうに、先生もう來ても好い時だと思つて居ると、誰とも知らず風呂場でざあ／＼水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな聲で相の手を入れて居る、いや結構、どうも良い心持ちだ、もう一杯な、どゝ家中に響き渡る様な聲を出す。主人のうちへ來てこんな大きな聲と、こんな無作法な眞似をやるものは外にはない。迷亭に極つて居る。

愈來たな、是で今日半日は潰せると思つて居ると、先生汗を拭いて肩を入れて例の如く座敷迄づか／＼上つて來て、奥さん、苦沙彌君はどうしました、と呼ばはりながら帽子を疊の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏して好い心持ちに寐て居る最中にワンワンと何だか鼓膜へ答へる程の響がしたのではつと驚ろいて、醒めぬ眼をわざと睜つて座敷へ出て來ると迷亭が薩摩上布を着て勝手な所へ陣取つて頻りに扇使ひをして居る。

「あや入らしやいまし」と云つたが少々狼狽の氣味で、ちつとも存じません
てした」と鼻の頭へ汗をかいた儘御辭儀をする。いゝ、今來た許りなんですよ。
今風呂場へ御三に水を掛けて貰つてね。漸く生き歸つた所で——どうも暑
いぢやありませんか「此兩三日は、ただ凝^{じつ}として居りまして汗が出る位で、
大變御暑う御座います。——でも御變りも御座いまして」と細君は依然と
して鼻の汗をとらない。え、難有う。なに暑い位でそんなに變りやしませんや。
然し此暑さは別物ですよ。どうも體^{からだ}がだるくつてね「私し杯も、ついに晝寢杯
を致した事がないんで御座いますが、かう暑いとつい——」やりますかね。好
いですよ。晝寢られて、夜寢られりや、こんな結構な事はないでさあ」と不相變
呑氣な事を並べて見たが、丈夫では不足と見えて「私なんぞ、寢たくない、質で
ね。苦沙彌君杯の様に來るたんびに寢て居る人を見ると羨しいですよ。尤も
胃弱に此暑さは答へるからね。丈夫な人でも今日なんか首を肩の上に載
せてるのが退儀でさあ。さればと云つて載つてゐる以上はもぎとる譯にも行
かずね」と迷亭君いつになく首の處置に窮して居る。奥さんなんぞ首の上へ